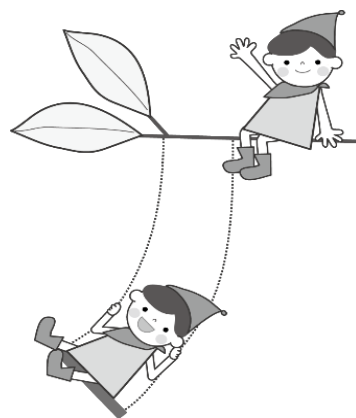


70年前の音ふたたび～ピアノ修復おひろめ会～



# 小出に伝わる ピアノのおはなし



小出地区まちぢから協議会  
小出小学校 150 周年記念事業部会



昭和二十一年五月、山本キヨさんは小出村立小出小学校に就職しました。

山本さんは一つ歳上の秋津さんと二人で、先生の資格を取るために鎌倉の神奈川師範学校へ通いました。

お二人はここで、月岡忠三音楽担当教授からピアノのレッスンを受けました。

この当時、町立の茅ヶ崎、松林、鶴嶺小学校と村立小出小学校の四校で音楽会が開かれていました。この時、会場の茅ヶ崎小学校にはピアノがあつたそうです。

小出小学校にはオルガンしかありません、山本さん秋津さん始め加藤岡之介校長はもちろん他の先生たちもピアノが欲しくて仕方ありませんでした。

山本さんはお父さんに相談しました。

「町の学校にはピアノがあります。何とかして小出小学校にもピアノを買ってもらえないでしょうか。」

山本さんのお父さんの幾興（いくよ）さんは、早速、校長先生や友人でもある村長さん、農業協同組合長さんたちに相談しました。でも、戦争が終わって間もなくの小出村にはピアノを買う余裕がなかったのです。

先生たちの願いを何とかしてかなえてあげようと、遠藤、堤、芹沢、下寺尾、そして行谷の各地域の人たちはいろいろと相談しました。そして、お芋を売ったお金を寄付してもらおうと決めたのです。このころの小出の主な農産物は、米と麦とさつま芋でした。

こうして村の人たちは、ピアノを買うのに必要なお金を集めました。二十三万円余りのお金が集まるには二年もかかりました。

当時の先生たちのお給料は四十円とか五十円の時代でしたから、大変高額な買い物だったのです。

昭和二十三年一月、川上書店の楽器部を通じ、待ちに待ったピアノが小学校にやってきました。早速二月四日、「ピアノお披露目音楽会」が開かれました。この時の校長は伊澤學先生に代わっていました。先生たちも子供たちもどんなに喜んだことでしょう。

それから先生たちは、一生懸命このピアノで練習しました。夜はロウソクの灯りで練習をする先生もいらしたそうです。

このころは、毎年三月二日と三日には学芸会が開かれました。体育館などない時代ですから、三教室の動く壁が取り払われて講堂に早変わりして、村中の人たちがお弁当持参で集まって来ました。

子供たちはお父さんお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんの前で、音楽や劇などをクラスごとに披露しました。ここでもピアノは大活躍したのでした。

このピアノは音楽の授業はもちろんの事、入学式や卒業式などあらゆる場面で活躍しました。ピアノを購入する家庭も出てきました。卒業後、音楽の道に進んだ人もいました。子供たちはもとより地域の人たちにもカルチャーショックを与え、音楽性に目覚めさせ、計り知れない影響を与えたのでした。

先生たちの努力は別の形でも実を結びました。戦後間もなくの荒廃した社会で音楽は人々の心に温かくしみ込んでいったのでしよう。ピアノ披露音楽会の後、その年の七月には音楽サークル「二本松ハーモニカアンサンブル」が発足したのです。ピアノのほか、ギター、ハーモニカ、太鼓などの楽器と合唱隊の集まりで、夏は校庭で、春・秋・冬は教室で村人たちを集めて開かれました。また、ピアノの伴奏で「のだ自慢大会」まで開かれるようになりました。カラオケの発祥とも言えますね。

こうして、このピアノの伴奏で「校歌」を歌い「蛍の光」の合唱に送られて、何人何百人の子供たちが卒業していったことでしょうか。

何年か経ちピアノは古くなり何度か修理をしましたが、やがて使えなくなってしまうました。新しいピアノがやってきたのは昭和五十一年ころでしょうか。当時の学校関係者のお話を聞きますと、昭和四十八年は開校百周年に当たりますが、このピアノも篤志家によって寄贈されたものだったということです。

「さて、この使えなくなったピアノをどうしようか？」先生たちは相談しました。「使えなくなったけれど、地域の人たちの心の籠ったピアノなので捨てるわけにはいかない。どこかに保管しておくことにしよう。」  
こうして、このピアノは倉庫の片隅にひっそりと置かれることになりました。

また何年かの月日が流れました。平成十六年四月に町山徹校長が赴任されました。その頃のこと、倉庫は解体されることになりました。中からホコリをかぶったピアノが出てきました。机やイスなど多くのものは処分されました。しかしこのピアノはまた処ず校長室に移されたのでした。

なぜでしょうか？この時も当時の人々のあたたかい心を察して、町山校長先生は先生たちと相談して残すことに決めたからでした。

平成二十八年四月、野木直樹校長が赴任してきました。野木先生はご自身もピアノを弾きますので、早速このピアノに触れてみました。当然のことですが、断線で音が出なかったり鍵盤が戻らなかったりしてうまく弾けません。野木先生は、

「このままではこのピアノは何時か朽ち果ててしまう。何とか修復できないものだろうか。」

時折り、三年生の地域学習などで和田キヨ先生（旧姓山本）は、昔の小出のお話をするため学校に来られていました。和田先生もまた壊れたままのピアノを何とか弾けるようにしたいといつも思っていました。お二人の思いは一緒でした。

平成二十九年三月、第四百四十四回卒業式に集まった来賓の前で、野木校長は言いました。「ここに七十年前に地域の人たちから贈られたピアノがあります。このままでは何時か捨てられてしまうことでしょう。五年後には市内で最も歴史のある小出小学校は創立百五十年を迎えます。その節目に当たり、再び皆様のお力でこのピアノを修復して卒業生のピアノニストによる記念行事を計画して式典に花を添えたいと考えますが如何でしょうか。」とお願いされたのです。

これを聞いた人たちは、野木校長の熱意にうたれました。そして早速、「まちぢから協議会」で話し合うことになりました。

役員会に諮り、運営委員会に提案し、平成二十九年度の総会にはかつて

「小出小学校百五十周年記念事業部会」を設けました。検討の結果「寄贈ピアノ修復百万円寄金」として募金活動をすることにしました。

六ヶ月の準備期間のあと事業部会の人たちは、平成二十九年十月から募金活動を開始しました。

当初二、三年はかかると思われた目標金額は、六ヶ月で目標額に達しました。七十年前の当時の人たちのあたたかい気持ちは、現在この地に住んでいる人たちにも脈々と受け継がれていたのですね。

野木校長と「まちぢから協議会」の人たちは話し合いました。野木先生は平成三十年三月に定年退職なさるので、修復に要するお金は集まったのだから早速修復してもらおうと。



こうして三月末、ピアノは修復のため千葉県印西市のピア・ピットという会社へと運ばれていきました。

ピア・ピット代表の渡邊さんは、修理工程を会社のホームページに掲載して知らせてくれました。これによれば、七十年の年月を経たこのピアノの解体は一つ間違えばバラバラになってしまうところで、それこそ慎重に行われました。中はカビやホコリで真っ黒に変色して、ピアノ線はすっかり弾力がなくなり針金のようになっていたそうです。

それでも昭和十七年に作られたこのピアノに使われている材木は意外にしっかりとっていて、欠落した部分を今の木材で埋めてゆく作業に耐えられるものだったそうです。

修復と並行して、帰ってくるピアノを今後どう活用していくかなどを検討するたため、記念事業部会内のワークグループとして、平成三十年五月二十八日に「修復ピアノ披露の会実行委員会」を立ち上げました。そして、平成三十一年の創立記念日翌日の五月六日に修復できたピアノのお披露目を開催することになりました。

平成三十年十月のある日、三瓶信哉校長宛にピア・ピットの渡辺さんから連絡がありました。

「修復が終わりました。十日にお届けします。」と。

十月十日は秋空が美しく晴れ渡っていました。出迎えるため三瓶校長先生をはじめ、まちぢから協議会や準備委員会のメンバーが集まって来ました。

午前十一時ころ、ピアノを乗せたトラックが到着し、渡辺さん他のスタッフの手で嚴重に包装されたピアノが校長室に運ばれました。ピアノの包装が解かれるのを待ちわびる人たちの前で修復を終えたピアノが姿を現しました。

外観は修復前とまったく変わりありませんが、渡辺さんの手で天板が外されピアノの心臓部の新しくなった反響版やピカピカのピアノ線が現れました。

鍵盤をたたけば落ち着いた深い音色が響きわたりました。まるで七十年前に関わりあってくださった人々の魂が籠ったような実にいい音色でした。出迎えた人々は、感動と喜びにつつまれました。

このピアノが小出の「希望へのしらべ」として、受け継がれることを願いつつ……



70年前のピアノお披露目会の様子です。

## 小出に伝わるピアノものがたり

発行 令和元年5月6日（月・祝）

編集 小出地区まちぢから協議会

小出小学校 150周年記念事業部会

発行人 小出小学校 150周年記念事業部会

部会長 鈴木 暹

問合せ 090-1123-4041

発行・印刷 小出小学校 150周年記念事業部会

\*この冊子は、和田キヨ（元小出小学校教諭）さんとお話するたびにお聞きして認めたことを理したものです。誤り等があるときは、聴き間違い、書き間違いによるものです。

